

(添付資料 1)

最優秀賞
文部科学大臣賞



共生の社会を作る一員として
岩手県滝沢市立姥屋敷中学校
二年 鈴木 雄 大

この間、友人と町の中心街に出かけた時のことです。数名の知的障害者の方々とすれ違いました。その時、心のどこかで「怖い」と思ってしまった自分がいました。

私は、どうしてそのように思ってしまったのか、戸惑いました。というのも私の家には一人の知的障害の方が住み込みで働いていたからです。

彼が家に来るきっかけは、祖父の知り合いの人から「障害者も働ける施設がほしい。」と相談されたからです。私の家は牛が約百三十頭いる酪農家ですから、人手は必要です。それでも当時は、知らない人を、しかも障害のある人を家に入れることに少し抵抗もあったようです。しかし、家族で話し合い、これからの社会は共生・共存を目指すべきとの考えから、彼は家で働くことになりました。私の父が小学生の頃でしたから、今年で三十五年になります。

今、彼は毎日朝、夕五時ごろから父と一緒に牛の搾乳をし、それが終わってから搾乳器を洗い、牛に餌をあげます。毎日、父と一緒に牛の世話をしているので、私などは気づかない牛の小さな変化も見逃しません。

「この牛は、今日は調子が悪いなあ。」

「この牛はもうすぐ子牛が生まれるぞ。」

そう呟いていると、確かにそうなのです。一つのことをやり続けることのすごさを中学生の自分でも気づく瞬間です。

そんな彼も、家に来たばかりの頃はやはり大変だったようです。外にあまり行ったことがなかったようで、食堂に行くと人が気になって食べられなかったり、刺身のわさびを誤って食べて具合を悪くしたり…。また、周囲の戸惑いも大きく、当時小学生だった父は、自転車をパンクさせられたり、見えないところで物を壊されたりしたそうです。地域の運動会に連れていくと、笑われたりもしたと言っていました。

彼の実家は、バスと新幹線を乗り継いで一時間半ほどの町ですが、我が家に来て十五年くらいたつと自分で帰れるようになりました。一度帰りのバスを乗り間違え、隣町に着いてしまい、地域をあげて搜索したことがあるそうです。

その時、彼は岩手山を見て歩いて帰って来たそうで、それを聞き家族は彼の成長やたくましさを感じてうれしくなったと言っていました。

今、彼を見て笑う人はいません。彼の我が家での働きぶりを見て、どれほど助かっているか、また彼がどんなに成長しているかを知っているからです。彼がいない時、私が彼の代わりに父を手伝うこともあります。父の疲労ぶりは目に見えて分かるのでした。

私が生まれた時からいる彼に、私は違和感を覚えたことはありません。それなのに、街で数名の障害のある方を見て、一瞬でも心に影が差したことに、自己嫌悪を覚えました。なぜ、そのような思いが脳裏によぎったのか、私は自分で自分が不思議でした。

そんな時、学校で「人権講話」が行われました。人には「誰にも侵されない人権」というものがあり、それはお母さんのお腹の中にいる時から、みんなが持っている、というものでした。人を差別してはいけない、人には守られる権利がある、それらを聞いて、私があの時、胸に抱いた「怖い」という思いは差別につながっているのかもしれないと思いました。表だって危害を加えたり、馬鹿にしたりしたわけではありませんでしたが、他の人と違うと見て、心によぎった思いは私の中にしこりとして残っています。

私をもっと幼かった頃、お盆で親戚が大勢集まった時のことを今でも時々思い出します。大人たちは一堂に会してお酒を飲み、思い出話や現在の近況を語り合っていますが、私たち子供は花火をします。そんな時、必ず彼は私たち子供について火をおこし、小さな打ち上げ花火に火をつけてくれました。それを感じるという温かい気持ちになります。

彼は、我が家にとっては「欠かせない存在」であり、私にとっては、生まれたときからそこにいることが当たり前の存在です。確かにしゃべり続けてちょっとうるさいなと思ったり、夜中まで帰ってこず心配させられたりするときもありますが、決して「怖い」存在ではありません。

私たちは、多くの場合、人を見かけで判断します。その人の人柄、人間性などは長くつきあわないと分からないからです。

私は、自分は人に差別などしないと思っていました。しかし、無意識の差別というものもあることに気づきました。自分の中にも少なからずあった差別の心を恥じ、平等に接するとはどういうことかを考えて努力します。そして、共生の社会を作るメンバーの一員になりたいと思っています。